

香 川

廃棄うどんからエネルギー

大量に出る廃棄うどんを再生エネルギーとして無駄なく活用する取り組みが始まった。これまでも廃棄うどんからバイオエタノールを作ってきたが、その過程で出るカスの処理が課題だった。高松市の機械メーカー「ちよだ製作所」が、カスから取り出したメタンガスで発電する装置を開発、24日午後を送電を始めた。

【道下寛子】

高松のメーカー カスから発電装置開発

県内には約800の「讀 研究所四国センター(高松 岐うどん」店があり、うど 市)などと廃棄うどんから ン用小麦粉使用量(200 バイオエタノールを作り出 9年)は全国トップの約6 万ト。うどんを打つ際の切 出る残りカスの活用策を考 れ端や、ゆでてから時間が 経過した麺など、廃棄うど ンが大量に出る。

ちよだ製作所は09年、独 度がスタート。メタンガス 立行政法人・産業技術総合 発電の採算見通しが立った



廃棄うどんからバイオエタノールを作った後のカスでメタンを発生させる装置の前で説明する池津英二社長

―高松市香南町のちよだ製作所で

ため、事業化を決めた。今年5月に敷地内に直径、高さがともに約8メートル筒形の発酵タンクを設置。温度が35度に保たれたタンク内にはメタン菌が入っており、廃棄うどんカス

を入れると発酵が進んで30日間メタンガスが発生する。そのガスを敷地内で燃やして発電する。

1日3トの廃棄うどんを処理でき、1年に一般家庭40〜50世帯分の年間使用量に相当する18万キロワット時を発電できる。年間700万円の売電収入に加え、廃棄うどん引き取りによる処理料収入も見込め、工事費を含む施設費約8000万円は約8年で回収できる計算だ。ちよだ製作所の池津英二社長(74)は「以前は廃棄うどん処理に燃料などエネルギーを使ったが、これからはエネルギーを作り出せる。気象によって左右されることもなく、計画的に発電できる」と話している。